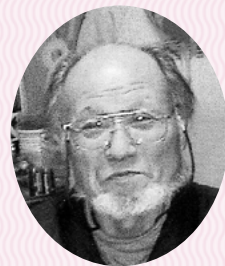


私の思い出



八方口 山里 寿男

忘れさったもの

1970年4月のこと、その頃、わたしはヒマラヤへ出て行って、折からエベレスト登山隊や、三浦雄一郎さんが滑るスキー隊のいる5350メートルのBC（ベースキャンプ）を訪ねていた。3月からそれまで他の方面に出かけていて、ネパール国内では未だ充分に栄養のある食料のなかった時代だったせい、ここで旨いご馳走にありつけ、元気を回復した。

そういう訳で、その帰りの足取りは軽く、ルクラへもどった。そこでカトマンズへ帰る飛行機を待ったのだが、一向に飛んで来ない。2日経ち、3日経った。そのうち沢山のフライト待ちの人々が集まる。この分では「俺が先だ」と喧嘩になりかねない。そんな訳で、歩いて帰ろうと決心した。人呼んで「エベレスト街道」古典街道、飛べば50分、歩けば1週間。さっそく2人の若いシェルパを雇い出発した。

その日はパイアンという土地の岩穴を探し出し、その中にテントを張った。その後、彼らはどこからか枯れ木を拾って来て、それに火を付けた。ところが、勢いはぐんぐん上がったのに反比例して、いつの間にか空は暗くなり、雨と霰がどっと降って来た。それまで気がつかなかった岩穴のすき間から、水滴が滝のように流れ落ちて来て、折角の焚火はいっぺんに消えてしまうと、見る間に、1人のシェルパが、その中の太い1本の、まだ火のついていない方を手に持ち、先端のまだ燻っている部分を胸の下に入れ、そこに息を吹きかけ、何とか消すまいと努力し始めた。彼の身体は、さっきからの水滴をいっしんに受け止めている。「もういいよ、あとで火をつければいいんだ」と、わたしは言うが、聞こうとはしない。ものの1時間も降ったであろうか、雨と霰は去って行った。気温は零度をさしていた。

彼の手に握られた小さな火は、2人の吹く息で次第に大きくなって行き、ついに又もとの状態にもどった。わたしは、その燃え盛る火で身体を暖め、彼らの作ってくれた食事をとったのだが、いつの間にか涙が茶わんに落ち始めていた。

火に対する敬虔な想い、ものに対しての貴重な想い。彼らをとった態度の中に、わたしたちがとくに忘れ去ったものが、沢山置されているように思われ、今更のように、自分たちの生活の甘さを思い知らされたのだった。

生きることの根源となるもの……こんな大切なものを、わざわざヒマラヤに来てみなければ、身に沁みて感じられない自分の浅薄さに気づいたが、言い知れぬ感動に、その夜なかなか寝つかれなかった。

追跡レポート

こないだ聴いたことあるー
どうなったただやまー

平成24年第3回定例会（平成24年9月）一般質問

【下水道関係について】

受益者間の公平性と住民説明会は。

問

法律の専門家に相談し検討します。また

答

専門家による職員研修を行い、組織の見直し

区長会、地域役員懇談会や広報誌、ユーテレ白馬等、地区

での車座集會等も検討します。

【その後】 検討中です。また区長会、地域役員懇談会や

広報誌で説明し、監査結果の圧縮版を新聞折り込みで村内に配りました。

【その後】 コンプライアンス研修を実施しました。また組織の見直しも検討しています。

議会だより102号の訂正とお詫び

(1) 9ページ「陳情等文章」中、長野県教職員組合大北支部白馬単組の審査結果が「継続審査」とありますが、正しくは「採択」です。

(2) 17ページ「わたしのひとこと」中、「鎌倉宏志」様とありますが、正しくは「鎌倉宏」様です。

ここに訂正し、お詫び申しあげます。

こうなっただけ